

提出日： 令和 3 年 2 月 26 日
所 属： 生命・環境科学部 臨床検査技術学科
氏 名： 古畑 勝則 職位： 教授

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

生命・環境科学部全体の微生物学教育において以下のような講義・実習を担当している。特に、臨床検査技術学科では、臨床検査技師国家試験科目でもあるため、補講を含め、国試対策に尽力している。また、大学院教育では、微生物学分野を開講し、博士前期課程および博士後期課程の学生を対象に専門的教育を実施している。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
微生物学総論	臨床検査技術学科	必	2	90
臨床微生物学 I	臨床検査技術学科	必	2	90
臨床微生物学 II	臨床検査技術学科	必	3	90
環境・病原微生物学	環境科学科	必	3	85
総合臨床検査学演習	臨床検査技術学科	選	4	85
微生物学実習	臨検・食品・環境	必	2	各 85
臨床微生物学実習	臨床検査技術学科	必	3	85
病原微生物学実習	食品・環境	必	2・3	各 85
卒業論文	臨床検査技術学科	選	2・3・4	各 5
微生物学特論	環境保健学研究科	選	1	5
科学者・研究者論	環境保健学研究科	必	1	10

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

大学は、社会に出るための教習所であると考え。特に研究室は、社会の縮図であり、先輩、後輩、同僚との人間関係を学ぶ絶好の機会である。そこで、私が、実践していることは、当たり前のことが当たり前でできる人間を育てることである。具体的には、始業前の当番と、挨拶、そして何事にも期限を厳守することである。また、本学科は、臨床検査技師を目指す学生が集まることからコミュニケーション能力を養うことは大変重要である。私が担当する微生物学の教育を通して社会で通用する臨床検査技師になれるよう、会話やプレゼンテーションも重視している。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

担当科目の教育において、社会人として当たり前のことが当たり前できるように指導している。決められた時間を守り、行動することは当たり前である。すなわち、10分前行動は社会人の常識である。学生の見本になるよう、始業時の10分前には教室に入り、準備をする。また、社会人の基本は挨拶である。学生にも積極的に挨拶するよう心掛けている。

私は、未だに板書を活用している。重要な項目をポイントとして板書し、それを学生に書かせることで記憶にとどめさせたい。しかしながら、現代の学生は視覚的に情報を吸収ことに慣れているため、DVDやPPも積極的に取り入れて講義を行っている。

微生物学では、微生物の名称は学名を使用する。学名はラテン語であり、読み書きは困難である。こうした学名を見ているだけで、学生はアレルギーを起こし、微生物学が嫌いな科目になる。そこで、私は、学名は記号であり、なぜ、その記号がついたか、命名の由来を考えることで、少しでも学名に親しみが持てるように努力している。

また、微生物学は理論的な理解ではなく、記憶することが多い科目である。そのため、繰り返しが重要である。書いて覚える、見て覚える、声に出して覚える、覚え方は皆様々であるが、小テストなどを繰り返すことにより覚える頻度を上げるように努めている。

アクティブラーニングについての取組

特にない

ICTの教育への活用

DVDやPPを利用して、視覚的に教育するよう努めている。学理へ資料等を積極的に掲載している。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

- ① 教育（授業、実習）の創意工夫（A～C）（B）
- ② 学生の理解度の把握（A～C）（B）
- ③ 学生の自学自習を促すための工夫（A～C）（B）
- ④ 学生とのコミュニケーション（質問への対応等）（A～C）（A）
- ⑤ 双方向授業への工夫（A～C）（C）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

- ① 臨床検査技術学科の講義・実習では、国家試験に準拠した内容となるため、教科書以外の内容を教授する時間はほとんどない。一方、環境科学の講義・実習では、基本的な事項に加え、最先端の情報や技術を紹介し、学生が興味を持つように努めている。

<p>② 毎回の課題や、中間試験の実施により、学生がどの程度理解しているかを把握するように努力している。</p> <p>③ 学生が取り組みやすいように、毎回、教科書の重要なポイントを課題として与え、一定期間において学生が自ら取り組むようにしている。</p> <p>④ 質問は、常にメールを使い、いつでもしやすいように日時は設けていない。休日や夜間でも質問があった場合は、可能な限り速やかに対応し、学生が納得するまで何回でも返信している。</p> <p>⑤ 臨床検査技術学科の場合は、時間的制限があるため、双方向授業を行うことは難しい。環境科学科においては、実施する方向で考えているが、まだ実践していない。</p> <p>⑥ <u>国家試験対策としてどのような取組をしましたか。</u></p> <p>国試対策要点集である「まずこれ」を利用して時間外の補講を数回実施し、合格率向上に尽力している。学生からの個別の質問には、休日や夜間であっても、可能な限り速やかに対応し、学生が納得するまで何回でも返信している。また、学生のモチベーションを最後まで維持するため、メールを活用して激励している。</p>
<p>5. 学生授業評価</p> <p>① <u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u></p> <p>学生が理解しやすい資料作りを心掛けた。</p> <p>② <u>①の結果はどうでしたか。</u></p> <p>わかりやすかった、とのメールをもらった。</p> <p>③ <u>②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。</u></p> <p>学生が理解しやすい資料作りを継続する。</p>
<p>6. 学生の学修成果</p> <p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u></p> <p>半期ごとに中間試験を実施して学生が取り組みやすいようにしている。</p> <p>② <u>教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</u></p> <p>卒業生から「研究だけでなく、物事の考え方や人との接し方などを教えていただき、その教えが社会人生活でも役立つことばかりで、本当に感謝している」とのコメントがあった。</p>
<p>7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）</p> <p>大学内で開催される FD 研修会には積極的に参加している。</p>
<p>8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）</p> <p>毎年、臨床検査技師を社会に送り出すことが目標である。そのなかで、研究に興味をもって</p>

大学院に進学し、研究者・教育者をを目指す学生が出て来てくれることを期待している。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

シラバス、レポート課題、教材（教科書、実習プリント）、授業評価コメント、卒業生コメント（長野県同窓会報）、大学便覧、微生物学研究室卒業論文集、永年精励賞表彰状（日本臨床検査学教育協議会）